

政治的プロジェクトとしての社会学
フラー、バイオリベラリズム、価値自由

11/11/2007

吉田 敬 (UTCP)

『新社会学的想像力』（2006）

- C. W. ミルズの古典、『社会学的想像力』の21世紀版
- 構成はかなり異なる
- 多様な読み方が可能だが、ここでは社会科学の哲学として読む

フラーの問題設定

- 社会科学は二つの異なるアプローチによる挑戦を受けている
人文主義的アプローチ（カルスタ他）
生物学的アプローチ（進化心理学等）
- 特に、生物学的アプローチから派生したバイオリベラリズムが問題
- バイオリベラリズムに対抗するために、社会学を政治的、特に社会主義的プロジェクトとして捉え直すことが必要（コント的実証主義の再生）

バイオリベラリズム1

- バイオテクノロジーの発展に基づいた優生主義政策；そこでは人間が存在したり、消滅していく条件の簡略化が促進される
- 新自由主義の自然な帰結
←マーガレット・サッチャー（とF・A・ハイエク）
- ※新自由主義・バイオリベラリズム：リバタリアンの政策（小さな政府）
社会主義・リベラリズム：福祉リベラル、あるいは社会民主主義的政策（大きな政府）

リベラル優生主義1

- 過去の国家権力による優生学とは異なる
- 「生殖の自由」を持つ両親が遺伝子工学を用いて、自分の子供に望ましい生物学的特徴（例：金髪碧眼）を与えたり、遺伝的疾患を持つ胎児を中絶したりすること（例：ダウン症患者の出生前診断）
- 両親の自由を尊重する意味でリベラル
- A. Buchanan, et al. *From chance to choice* (2000)
- N. Agar, *Liberal eugenics* (2004)

リベラル優生主義2

- J・ハーバーマス、『人間の将来とバイオエシックス』（[2002] 2004）
 - F・フクヤマ、『人間の終わり』（2002）
 - M. Sandel, *The case against perfection* (2004, 2007)
 - 金森修、『遺伝子改造』（2005）
 - 桜井徹、『リベラル優生主義と正義』（2007）
- ※フラー：2004年、スウェーデンでの夏の学校において言及（→ハーバーマス、フクヤマ）

バイオリベラリズム2

- サッチャー：「社会などというものは存在しない」（→福祉政策からの政府の撤退）
- フラー：こうした動きは「人類のプロジェクト（the project of humanity）」の障害である
- 人類のプロジェクト：地上に楽園を築くという18世紀啓蒙の計画；社会科学の目的；一神教の世俗版；人間中心的世界観（anthropic world-view）に基づく（←コントの人間教）

人間中心的／カルマ的世界観

- 人間中心的世界観（anthropic world-view）
ユダヤ教、キリスト教、イスラム教に共通；
人間に特権的な地位を認める
- カルマ的世界観（karmic world-view）
ヒンドゥー教や仏教などの多神教やネオ・ダー
ウィニズムに共通；異種間の遺伝的重なり合
いを強調；人間に特権的な地位を認めない
※トーマス・ハクスリー、ロマネス講演
フランシス・フクヤマ

人間中心的世界観への反論

- 人間と他の動物（特に、チンパンジー）はDNAを90%以上共有
 - 人間も自然の一部だから、好き勝手に振る舞うべきではない
- 環境保護運動など

フラーの反論

- 確かに他の動物や環境も大事だが、機はまだ熟していない
- 自然の権限は人間の権限に優先しない；政策には優先順位がある；先進国の中産階級のライフスタイルを享受できない人びとが世界にはたくさんいる。そうした社会的弱者を救うことこそが必要（←福祉国家の衰退）

価値自由の問題

- フラー：社会主義的プロジェクトとしての社会学（→社会哲学と社会科学の境界）
- 社会科学は価値自由でなければならないのか
- 社会科学の哲学における、重要問題の一つ
- 例：ヴェーバーとシュモラーの価値判断論争；批判的合理主義とフランクフルト学派の実証主義論争
- フラー：政策担当者は（価値自由な）社会科学者の研究に介入せず、（価値自由な）社会科学者は政策担当者の決定に口を挟まない

社会学と社会主義（フランス）

- 「社会学」：オーギュスト・コントの造語
コント：サン・シモンの弟子
神学的、形而上学的、実証的段階（フラー：
単なる還元主義ではない）
数学、天文学、物理学、化学、生物学、社会学
社会学と社会主義はコインの両面（→フラー
への影響）

社会学と社会主義（ドイツ）

- Robert N. Proctor, *Value-free science?* (1991)
政治的・社会的文脈で価値自由を考えるべき
価値自由：自然科学を模倣するためではなく、
政治的事柄から科学の自律を守るため
ドイツ社会学者：社会学と社会主義の混同を
恐れていた（→社会学の政治化を排除）
理由：1918年以前、大学教授は国家（皇帝）
に仕える存在であったため（←1911年時点で、
社会民主党が第一党；しかし1918年以前、正
教授は誰も、社会民主党員ではなかった）

プロクターの議論の帰結

- プロクターのように考えると、価値自由を金科玉条のように捉える必要がなくなる
- 社会的・政治的状况にあわせて、価値自由を考え直すことが出来る
- とすれば、フラーのように、バイオリベリズムに対抗するために、社会学と社会主義を結びつけることも可能かもしれない
- しかし、問題がないわけではない

価値自由と教育1

- 価値自由が唱えられた背景:どのように社会学を教えるべきなのか、という問題
 - ヴェーバー、『職業としての学問』（1919）
教師が自らの立場を学生に強いるようなことがあってはならない（→フラーは教師ではなく、指導者として振る舞っている）
- ※フラーは議論を引き起こすために、あえて極論を述べている可能性がある

価値自由と教育2

- しかし、ヴェーバー自身は社会学者個人の倫理に訴えるにとどまっている
- その点では、間主観的な相互批判の制度化によって、価値自由の問題を解決しようとしたポパーは評価に値する
- しかし、教室において、相互批判が本当に可能なのか。教師と学生の権力関係の問題が残る

結びに代えて

- 確かに、フラワーが言うように、バイオリベラリズムが突きつけている問題を考える必要がある
- 特に、現在の科学活動は政治的・経済的基盤なしには、ありえないのだから、科学哲学者がこうした問題に目を向ける必要がある
- しかし、フラワーの議論は価値自由と教育の問題を引き起こす
- こうした問題を解決するための制度作りが必要になると思われる